



赤穂事件と忠臣蔵文化

「義士討入」長安雅山筆『赤穂義士真観』のうち（赤穂市立歴史博物館蔵）



赤穂義士祭



赤穂城跡ジオラマ（赤穂市立歴史博物館）

■ストーリー

天下泰平の世、元禄時代を騒がした大事件「赤穂事件」は、元禄 14（1701）年に、江戸城で赤穂藩主浅野内匠頭長矩が吉良上野介に斬りかかったことに端を発します。幕府の不公平な裁きを不服とし、1年 10 か月後に討入りをはたした旧赤穂藩士たちのことを当時の人々は褒めたたえ、人形浄瑠璃や歌舞伎の演目として「仮名手本忠臣蔵」が生まれました。

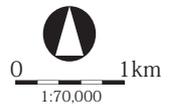
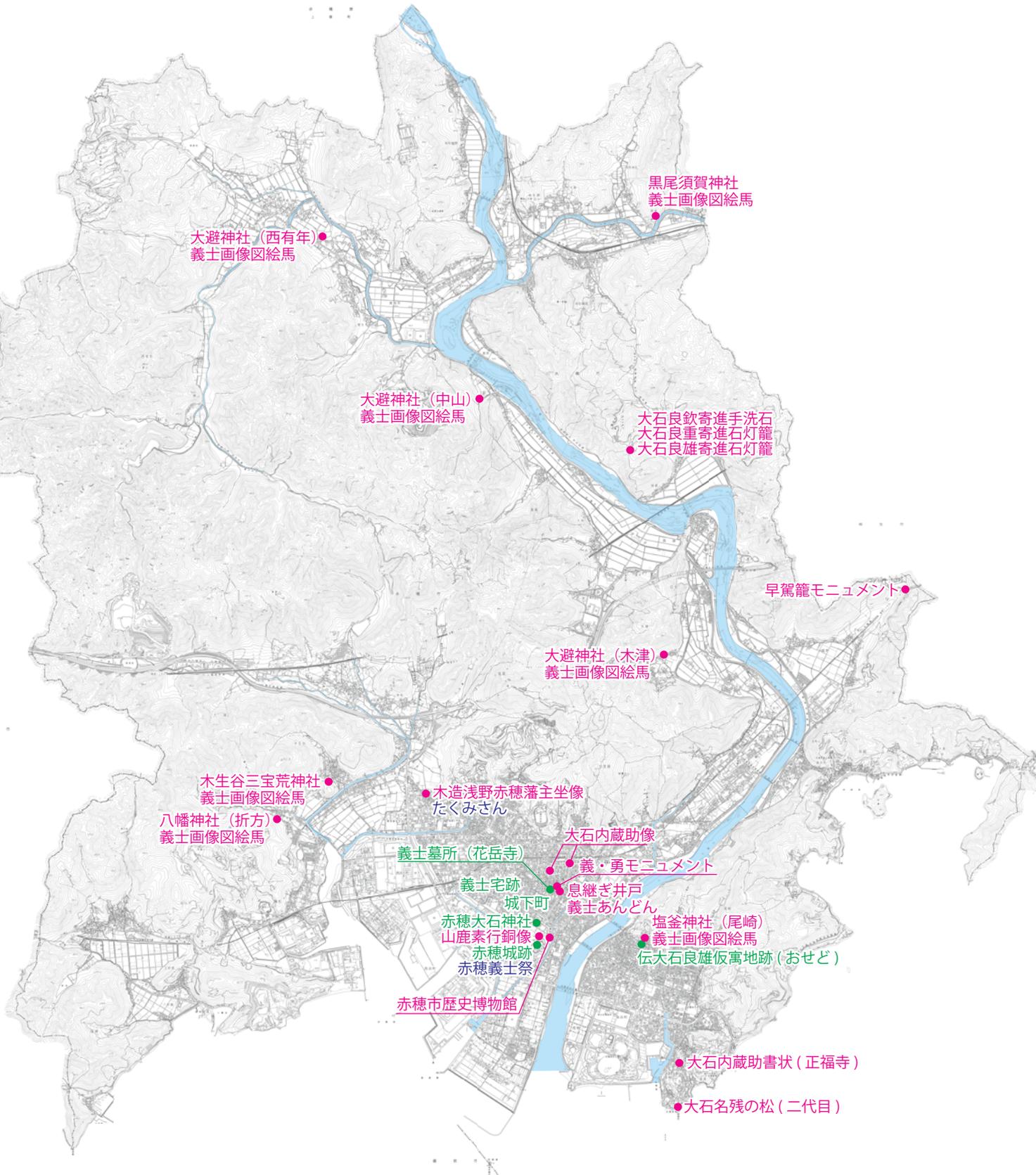
「忠臣蔵」の名で親しまれるこうした一連のストーリーには、史実のみならずさまざまな虚飾も加わり、日本人の心の拠りどころになりました。現在では演劇や映画など文化としての広がりを見せています。

赤穂市には、「赤穂義士」を生んだまちとして、その遺産が数多く残されており、その歴史のみならず赤穂義士のところに触れることができます。

事件の流れ

元禄14(1701)年	
3月14日	江戸城本丸御殿松之廊下で赤穂藩主浅野内匠頭長矩が吉良上野介義央に斬りつける。浅野長矩は即日切腹。
3月19日	藩主刃傷・切腹の知らせが赤穂に届く。
3月27日	赤穂城で大評定始まる。
4月 19日	赤穂城の明け渡し。 龍野脇坂藩による在番が始まる。
6月25日	大石内蔵助、赤穂城下を退去し、28日には山科に転居。
元禄15(1702)年	
7月18日	浅野大学、広島本家に預かりとなる。
7月28日	円山会議。討入り決定。
12月14日	吉良邸に討入り、義央を討ち取る。
元禄16(1703)年	
2月4日	46人切腹。吉良義周は信濃に配流。
宝永6年(1709)年	
8月20日	綱吉死去の大赦により浅野大学赦免。
宝永7年(1710)年	
9月16日	浅野大学、500石を賜り浅野家再興。

■主な歴史文化遺産の分布



凡例	● もの	● 場	● こと
----	------	-----	------

赤穂事件をたどる

刃傷事件から赤穂城開城まで



「仮名手本忠臣蔵十一段目 夜討人数ノ内 大星力弥肖像」初代歌川国貞

事件の発端

元禄 14(1701) 年 3 月 14 日 午前 11 時 ころ、江戸 城 本 丸 御 殿 松 之 大 廊 下 で 事 件 は 起 き ま し た。赤 穂 藩 主 浅 野 内 匠 頭 長 矩 が、高 家 筆 頭 吉 良 上 野 介 義 央 に「こ の 間 の 遺 恨 覚 え た る か」と 声 を け け、振 向 い た と ころ を 斬 り つ け、逃 げ よ う と す る 上 野 介 の 背 中 に ま た 一 太 刀 あ び せ た の で す。赤 穂 事 件 の 発 端 で す。

浅野は、刃傷の直後「上野介にはこの間中、意趣があるので、殿中、しかも今日の事、恐れ入るが、是非に及ばず討ち果そうとした」と述べています。吉良自身が意識していたか否かは不明ですが（吉良は恨みを受ける覚えは無いと述べています）、浅野は吉良に対して意趣を持っており、この事件は決して突発的な事故ではなかったのです。

この年、吉良は 1 月 28 日 に 上 洛、参 内 し、江 戸 へ 帰 っ た の は 2 月 29 日 で し た。一 方、浅 野 は 2 月 4 日 に 勅 使 御 馳 走 役 を 拜 命 し、3 月 10 日 ま で に 準 備 を 整 え て 伝 奏 屋 敷 に 詰 め ね ば な ら な り ま せ ン で し た。双 方 と も 時 間 的 余 裕 が なく、か な り 気 が 立 っ て い た と し て も お か し く あ り ま せ ン。浅 野 が 短 慮 で あ っ た に し ろ、ま た 吉 良 に 悪 意 が あ っ た か 否 か は 別 に し て、吉 良 は 浅 野 に 対 し て き つ く 叱 り つ け た り 愚 弄 す る な ど の バ ワ ハ ラ を 起 こ し て い た と 考 え ら れ て い ま す。そ の よ う な 小 さ な 要 因 が 積 み 重 な り、浅 野 は そ れ に 耐 え が た き 侮 辱 を 覚 え、刃 傷 に 及 ん だ よ う で す。し か し、そ れ は 吉 良 に と っ て は ご く 日 常 の こ と で あ り、特 に 思 い 当 た る ほ ど の こ と で は な か っ た の か も し れ ませ ン。

なお、今日的な感覚からは「この間中」は「数日前から」のように考えられますが、当時の感覚では、もっと短い期間である可能性もあります。そうでなければ「上野介にはこの間中、意趣があるので」という浅野の言葉の説明がつきません。

「殿中刃傷」長安雅山筆『赤穂義士真観』のうち
(赤穂市立歴史博物館蔵)



赤穂城跡（国史跡）
浅野長直が築城した。



山鹿素行銅像
赤穂藩に大きな影響を与えた。



大石良欽寄進水鉢
神護寺に奉納された。市指定。



赤穂城跡二之丸庭園（国名勝）
大石頼母助屋敷に隣接していた。



浅野長矩坐像（光浄寺蔵）
赤穂藩浅野家三代藩主。市指定。



花岳寺
浅野家菩提寺で義士墓所もある。





早駕籠モニュメント
高取峠にある事件の一報を
伝えた早駕籠モニュメント。



息継ぎ井戸
早駕籠が一息ついたと伝える
旧上水道の汲出枧。



銀式分札
(表) (裏)



銀拾文目札
(表) (裏)

赤穂浅野家藩札
刃傷事件後、速やかに
回収されて焼却処分さ
れたため、浅野家の赤
穂藩札は全国に5枚の
みしか確認されていな
い。市指定。

幕府の不公平な裁定と処罰

浅野が吉良に斬りかかり、吉良は無抵抗であったのですから、今日的な感覚からは、この事件は喧嘩とは言いがたいと思われるかもしれません。

しかし元禄の時代、武士が武士に遺恨をもって斬りつければ、それは喧嘩にほかならなかったのです。事件を見聞した武士たちはそう感じていましたし、後に吉良邸に討ち入った大石内蔵助ら浅野旧臣らもそう考えていたのです。

この幕府によるお手軽で不公平な裁定が、1年10ヵ月後の元禄15年12月14日に吉良邸討入り事件という第2の赤穂事件を引き起こしたのです。

早駕籠と城明渡し

浅野家江戸屋敷から2度の早駕籠、その間に長矩の実弟で養子の浅野大学長広からの足軽飛脚が赤穂へ凶報と指令をもたらしました。

赤穂では世に名高い藩札の六歩替え（藩札を額面の6割に相当する銀・銭に交換）に加え、藩士への退職金支給、城と領地の明渡し準備に奔走することとなりました。

さてこの前に、赤穂城を幕府の命令どおり明渡すか否かの議論が百出しました。籠城、あるいは殉死を望む者達もいましたが、「(浅野) 大学様が人前に立てるようにならないことには、このままではおかない。以後の含みもある」という大石の主張が受け入れられ、無事に開城する運びとなりました。しかも大石は、切腹する覚悟のある者達から神文血判を取り、家臣の心を一つにまとめることにも成功しました。

7月に浅野大学の広島藩差し置きが決まり浅野家再興の望みが断られた為、京円山会議で大石・原・堀部ら19人が仇討ちを決議し、堀部親子ら急進派の分裂を避けることができたのです。



播州赤穂家中近辺町在之絵図
(たつの市立龍野歴史文化資料館蔵)
元禄期の城下図に赤穂城請取りルートが記載されている。



赤穂城御請取行列之内抜書(部分) 外内松意筆
天明4(1784)年 たつの市立龍野歴史文化資料館蔵
脇坂龍野藩が赤穂城請取りを行った際の絵巻。



連署起請文

井口半蔵・木村孫右衛門が、一度は大石内蔵助に提出して同志を誓った連名の起請文が、同志から脱落したために残されたもの。血判が押されている。市指定。



伝大石良雄仮寓地跡(おせど)
赤穂城開城後に大石内蔵助良雄が残務処理を行う間、仮住まいしたと伝える。現在は桜の名所となる。市指定。

赤穂事件をたどる

討入り、幕府の処分

吉良邸討入り

刃傷事件から1年10カ月の後、元禄15年12月14日深夜、大石ら浅野旧臣は江戸本所の吉良邸に討入り、上野介を討取って泉岳寺の亡君墓所へ首級を捧げました。

なぜ大石らは吉良邸に討入らねばならなかったのでしょうか。彼らの妻や子に遺した遺書には「討入りに成功しても失敗しても、死があるのみ」「家族にも罪が及ぶであろうが、取り乱さないように」などと書かれている。それらを読むと冷静で綿密な計画のもと、死を覚悟して討入ったことが分かります。

「高家(吉良)のような方に対して家来共が鬱憤をだくことは申さないことですが、君父の敵と共に天をいただくことは我慢できません。きょう上野介殿のお宅へ行き、亡主の意趣を継ぐ志である」というのがその大意です。

この内容を見ると“亡君の遺志を継いで吉良を討つ”ということを訴えています。これが第1の討入り理由です。しかしそれはむしろ建前の理由、表向きの目的なのです。大石らの考えはもっと深いところにあり、幕府がみずから破った喧嘩両成敗法を自らの手で完結することだったと考えられます。



大石内蔵助良雄像 (JR播州赤穂駅前)



大石内蔵助書状 (正福寺蔵)
討入り前夜の12月13日に花岳寺、正福寺、神護寺宛に出した暇乞い状。

「義士討入」長安雅山筆『赤穂義士真観』のうち (赤穂市立歴史博物館蔵)



浅野内匠家来口上書 (義士墨跡)
討入り後、熊本藩に預けられた大石以下の旧藩士10名の辞世、口上書などが残されている。市指定。



「大石内蔵助良雄切腹」長安雅山筆
『赤穂義士真観』のうち (赤穂市立歴史博物館蔵)

いま1つの大きな目的は、不公平な裁定を解消するという事です。そのために、大石ら46人(足軽 寺坂吉右衛門が途中立ち退く)は吉良上野介を討ち果した後、幕府大目付に自首したのです。討入り後、もし大石ら全員が切腹して果てていれば、幕府はその処置に苦慮することはなかったでしょう。

大石らは「我々は幕府ができなかった喧嘩両成敗を自ら行った。これをどう処理する」と自らの命を幕府に差出したのでした。

幕府は、浅野内匠頭に対する即日切腹とは異なり、49日間という日にちをかけての慎重な協議の後、46人に切腹という決定を下しました。いっぽう吉良家に対しては、養子左兵衛を不屈きとして、知行地召上げのうえ、流罪としたのです。

幕府に喧嘩両成敗させたことによって、ここに赤穂義士の復讐は完結しました。そして、それは一面には封建的忠義の行動の側面(亡君の仇討ち)を持ちますが、他方では巨大な権力悪に、何の力も持たない者達が自らの命を賭けて異議を申立てた反権力の行動でもあったのです。



義士あんどん
赤穂事件をからくり時計で解説。

赤穂事件をたどる

忠臣蔵文化のひろがり



「仮名手本忠臣蔵十一段目 夜討人数ノ頭領 大星由良之助肖像」初代歌川国貞

忠臣蔵

この出来事は、身分の上下を問わず広く民衆の心を捉え、討入り直後には事件を窺わせる芝居が上演されるなどしました。そして討入りから 47 年後の寛延元 (1748) 年に、竹田出雲・三好松洛・並木千柳の 3 人によって人形浄瑠璃・歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」が完成したのです。

この作品は元禄の事件を太平記の世界にたくみに置き換え、全十一段に四季の移り変わりを取り入れ、多彩な舞台を作り上げています。

塩冶判官の無念の最期、忠臣による苦心の末の討入りを柱に、お軽・勘平の悲恋、足軽寺岡平右衛門の忠義、町人天川屋儀平の義侠心など数多くの見せ場を盛り込んでおり、赤穂事件を題材とした演劇の集大成と云っても過言ではありません。

以後、この事件をフィクションとして扱った作品は「忠臣蔵」と呼ばれ、後生に大きな影響を与えて現在に至っています。

例えば、大序から十一段目まで全ての幕を落語で聴く事ができます。聴衆が「仮名手本忠臣蔵」の内容を諳(そら)んじていてこそ初めて擦(くすぐ)りが効くのです。また、芝居の場面やそれを演じる役者の錦絵は 4,000 種以上もの作品が確認されています。

「忠臣蔵」を題材とした文学・舞台・映画・ドラマなどは枚挙にいとまがありませんが、現代の特筆すべき舞台作品として、島田雅彦：脚本・三枝成彰：作曲 オペラ「忠臣蔵」、黛敏郎：作曲・モーリス・ベジャール：振付 バレエ「ザ・カブキ」があります。

大石ら赤穂義士の行為がいつの世にも民衆に支持されたからこそ、創作としての「忠臣蔵」が独蔘湯(起死回生の薬)として今日まで人気を保ち続けているのです。



「大星由良之助藤原良雄」三代歌川豊国



「組合いろは建前」初代歌川豊国 市川團十郎の名がみえる。



文楽人形「大星由良之助」



浄瑠璃本「仮名手本忠臣蔵」七段目「大盡の錆刀」の部分。

「義士仇討之図」初代歌川広重

※本ページの写真はすべて赤穂市立歴史博物館蔵



赤穂事件をたどる つなぐ心

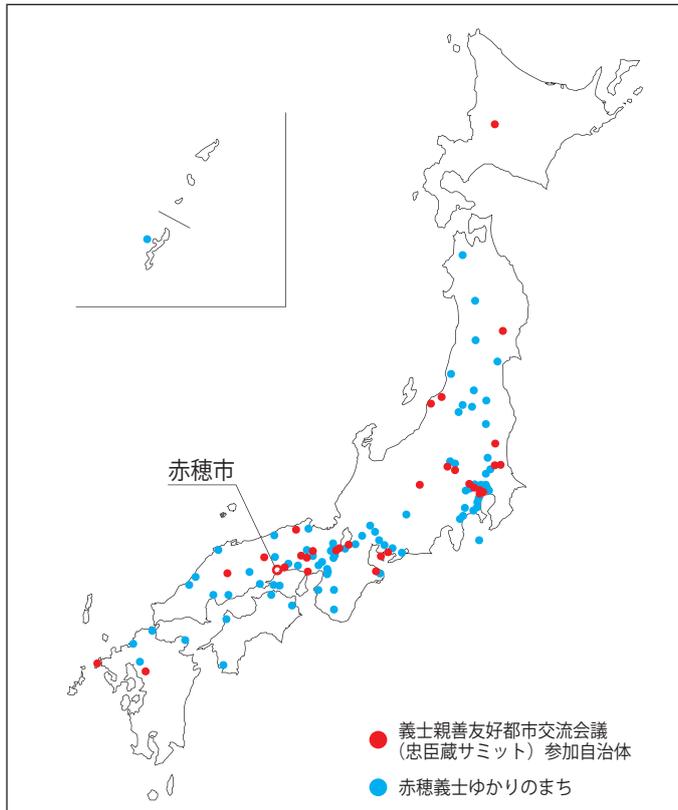


「仮名手本忠臣蔵 夜討人数ノ内 小寺千内肖像・佐藤与茂七肖像」初代歌川国貞

事件から300年も経過した「赤穂義士」が今も語り継がれているのは、当時の人々が称賛した、つまり共感したことの証であり、また「忠臣蔵文化」もしくは精神として人々の心の基層になったためでしょう。

事件後、江戸時代から近代にかけて各地で義士絵馬の奉納が行われ、崇敬を集めました。また近代になって赤穂城跡が民間に払い下げられるなか、花岳寺住職の仙珪和尚によって大石内蔵助良雄宅跡の土地が購入され、大正元（1912）年には赤穂義士らを祭神とする赤穂大石神社が建立されました。また市内各地では義士を祀る忠魂碑や大石内蔵助像などが数多く建てられているほか、義士の討入り日にあたる12月14日には市内最大のイベントとして赤穂義士祭が開催されています。

さらに忠臣蔵に見いだされた義士の心は全国各地に広がっており、ゆかりの地として112箇所が挙げられるほか、義士親善友好都市交流会議（義士サミット）が毎年開催されるなど、この事件を末永く記憶に留めるだけでなく、まちづくりに活用していく動きが広がっています。



赤穂義士ゆかりのまち



黒尾須賀神社義士画像図絵馬
嘉永2（1849）年に奉納された、市内最古の義士絵馬。絵師は京狩野派の菅原永得。市指定。



木生谷三寶荒神社義士画像図絵馬
幕末赤穂の絵師、長安周得の作で旧赤穂藩領内で唯一の江戸期の義士絵馬。市指定。



花岳寺 義士木像
義士33回忌の享保20（1735）年から製作を開始し、100回忌の享和2（1802）年に完成した。



赤穂大石神社
大正元（1912）年に創建。赤穂城内の大石内蔵助良雄宅跡にあり赤穂義士らを祭神とする。境内には宝物館のほか義士木像館、大石邸庭園などがある。



義士宅跡
城内や旧城下町20カ所に点在。それぞれ石標と解説板が設置されている。



大石良雄宅跡長屋門
赤穂藩浅野家家老の大石内蔵助良雄の屋敷は享保14（1729）年に焼失、長屋門のみが残された。



たくみさん

浅野長直によって開発された戸島新田にある光浄寺で、浅野長直の命日の8月24日に地域住民によって追慕が行われる。



赤穂義士祭

赤穂義士が討ち入りを果たした12月14日に行われる市内最大のイベント。明治36（1903）年から開始された伝統行事でもある。忠臣蔵パレードには大名行列、義士伝行列、山車、義士行列などが行われる。写真の大石内蔵助は西郷輝彦さん。



忠臣蔵サミット

赤穂市の呼びかけで平成元（1989）年からはじまった義士親善友好都市交流会議（忠臣蔵サミット）。現在は全国32の自治体が加盟している。

義士学習の取り組み

総合的な学習として地域の偉人を学習している。



子ども義士物語

赤穂市立城西小学校が「総合的な学習」の一環として行っている恒例行事。6年生児童が台本を作成し、手作りの演劇を行う。その成果を活かして現地観光案内も行う。



小学生の観光案内

赤穂市立塩屋小学校が赤穂の歴史に関する研究成果を現地で発表。



赤穂市立歴史博物館

赤穂義士をテーマの一つとして展示を行っている。



大石名残の松（二代目）

御崎を出立する大石内蔵助を顕彰する松が、後世に植えられた。



赤穂市立歴史博物館 館内展示



大石内蔵助良雄之像
御崎展望台広場にあり、京都山科に向け船で出立する際の姿を表している。